俗說辨七　僧尼

1 3
1834
7上

イ 3
1834
巻 7

イ 5
1271
巻 7

本朝俗説辨七目録

僧

一 百済乃僧日羅来朝の説　一二丁ノ面
一 庁岡の飢人と達磨と説　五丁ノ面
一 行基菩薩い卵生と説　五丁ノ裡
一 弘法大師験徳付守敏僧都と形殺と説　六丁ノ裡
一 玄雅河内梨左右業平殺と説と説　九丁ノ面

一 抹香紀僧正が霊験感応伝説を説　十一丁ノ面

一 志賀寺上人京極法皇の恩ゆゑ愛して験を顕す説　十一丁ノ裏

一 慧心僧都寂ところ紀胸ゆゑ蓮華を生ず説　十二丁ノ裏

一 西行法師普賢菩薩をおがむる説　十三丁ノ面

本朝俗説辨七

僧

○百濫抄俗日羅朱朔説

俗説云日羅は百濫の俗なりと朱朔説

今按ずるに日本紀に敏達天皇十二年の秋七月丁酉の詔によりて我先考天皇乃世に領ゐる所の任那国を彰弘の為に滅さる先考天皇任那をうしなはんこと本意にあらざるをもつて任那をうしなはんことを悔て百濫よりある史大苦小の国造今考るに肥前肥後と洲者いと大の国とりよりえい肥後出

達率日羅（弘仁私記に日羅達率と冠名）を聞みて勇力り朕彼しれ
てうんしをつかはして紀国造押勝吉備海部直羽嶋と
を百濟よりたてまつりて日羅をよびて共に十月二人の
使百濟より出て百濟王日羅をすすめてかへさむとす
るに羽嶋と吉備と又羽嶋を百濟よりたてまつりの羽嶋
百濟にゆきてまづ日羅に面あひしく
をこひいらう日羅が門よりもてまづくまて家内
にもと韓婦おもの羽嶋を沼の中に
まへどれども後にもさうひの内に入日羅し
うてもなほうと死よりたぎの先ひをうりたぎの

いとく百濟王天朝をうこびをりたてまつりたてまつる
ばかりでめてかへさむとす。弼宣勅をのべむとすとけくいの
まうふ人をこん勢て急よめさむ。百濟王勅をうけかへを
ばかりとこの羽嶋を名ふまうこせて日羅を殺こと我の海。
百濟王勅を恐れてくろむくことあさいどそこどくれ人
とうへとく。日羅答吉備乃臣の海の地奏よりこの勅延
大伴糠手子連とたてまつりなぐさめ労まつる又大夫等を
那波乃館よりたてまつりめうつぶとさ日
羅被甲るに禁門乃下にいたり。廡前よりとく進て
退さ跪拜とくいとく。橋隈宮御寓天皇宣化天皇の世よ。我君

大伴金村大連。國家のくるふを海乃養よりこれせ。芦小
國造刑部靫部ゆ利斯岐が子信。達率日羅。天皇の召
とゆきて来朝せりとそ。甲とそさて天皇ふまる。行
舘をゆ斗棄市に営をて。日羅紙任せ。むゆ信日官。物
部贄子連。大伴糠子連とはそ。て。国の政を日羅そ
とつ。先年。日羅てそ。天皇の下を治えさせ
はそんよ。まゆ黎民を使そ。やゆ治くなんでそ。
やゆ多をおとさんや。神がつくそ列信百姓を饒富そ
年三年にて。合紙写。多を写て使民とそ。
めで。ゆ史とさけどして。そくそ国乃難をうまくせ。

そうさ船をおかくはくそ。ゆ信ごふはそ。神をさて。蕃客よ
乃人多て。はそ。使をはそ。て百濟王紙そ。王
そ。て。来そどはそ。まゆとそ。まそ。はそ。ちとぐめをさ
て。欽伏乃人を生ぜ。多。治よ罪紙そはまつ。と奏ゆを。
宴よ日羅に與。て日本に来まそ恩率参官等。百濟よ
かくらんとそ。とさ。薬余とふ多をちうづゆて汝を志
そ。そ。く。ゆ。とぐまゆて。我等が筑紫をそん紙をそ。
日羅紙害とべ。ふ。そうぐまよまそ。て爵禄とあそん
とつ。薬余等。治。そ。とぐまそ。日羅が来て村そ。罪
波乃宅をそはまそをうぐひてあきを殺とじゆへよ

沿〻く小那西畔丘より救め養つて白羅が妻子を伐て百濟
乃者と一所よりそむいるるぞ。いうるう変りあるんとて別宮より
墨俣に出るとかくめくとつ〻めよ羅より伐しまろ有
使を差かよはせつ〻。日羅が眷屬を召て俣に出ると賜ふ。
芦小君これを殺して弥賣島特別にとて。日羅が屍を芦
北ようはつ〻義ふとありぞ。こに日羅八百濟の者よあるぞ。
紀伐出芦小新乃領まれみつく。賢にして勇あり。宣化天
皇の時宮小百濟より住くとうぐまり。欽明帝乃召小住くと
帰朝せるものなり。甲を彼馬小乘。廐戸皇子よりとんで
出てとなる紙をつく。倭よあるざかをとるへ。律より改事

をのるて帝をいさむといくどを。言事旬御屠乃事に
あづうとぞ。廐戸皇子よあくること。あまをとりて倭
伝乃あやまり紙もるべ〻

○片罌飢人を葬とる伝

倭伝より。聖徳太子片罌よあそびて達磨よあひるとを
或同。日本紀より推古帝二十一年廐戸皇子片罌よなそび
まとる。飢者乃のかるに姫居をるぶ皇子あられ
みて食をあるへ衣と覆つめるに。飢者数紙術ど
とあり。拾遺和歌集より。聖徳太子片罌乃歌道人の家小
おつ〻るに飢る人乃死かとりふぬせりとる。上古乃

書よいそぐ能人とだろう記しそ達摩といなりそふよ
そもあ後漢逸乃異人そそくたまくたそに留そもの
なるべ。そうる伝後世よりて浮屠の軍かれ能人
と達摩と称ど。そうづるそと達摩塚とうべ。寺を建て
達摩をと号し。新倭孫をふ蔵て第世よ偽を貽そのを
○行基菩薩を卵生やそいよ伝
倭伝云。行基菩薩い和泉国大鳥郡乃古民の婢女葉所生
いそ乃子なり。母懐姙そ十二月よ及び。ひとつ卵を
うめり。ねどるをあ。を捨りいきて門前乃榎木枝よそ
上ふ。に卵やぶれて男子いでぬ。これ行基菩薩なりとひ

とそ。如うくあれを非異とを陶隱居乃云ふ
と按ずよ倭土の人と称どるとそくい必怪伝を附会しそく
そ人をけづをとあり。時孫が和泉綱見が妻巫の老を
あぎそくいそく。陸修氏が素ろ乃孕で左脇よ三人をお。
右脇よ三人をおと。汝南乃屈雍が妻王氏い右乃腋下小腰
乃上より男児を生。晉のときさ魏興李宮が妻樊氏い髀乃
上れ瘡やぶきて子伝うそ。陽翟の女い姙ぐ三十月よ及び。
子母の腑より出。考ずよ西樵埜記五雜俎
子母の者あるとい人卵より生あるひい人卵より生
あるとい行基がとぐひうれり。博物志よ一国王乃小夫人一肉團
をうむ。南やぶれて千乃男子生ずと記せり。事文類聚よ衛君
の妾人卵をうむやぶれて一男子生ずと伝せり。法苑珠林ニ云ふ
天竺よ一女あり。梅よ入ずて男卵をうむ。

より一女出とあり元亨釋書に云ク紀伊國八代郡乃者一肉
團をうむ卵やぶれて一女子出ツ俗説尼と号ス名古屋に同 馬より生る
者あり皆これ非人なるべかりのごとし紀よりあるべしひとへに
名獣に同じ我国胞乃人と列臨をへうるべきにあらず。
此伝をもつて吳音の非輝なることを知べし
○弘法大師 驗徳付守敏伝紙を行ひて救を祈
俗伝に弘法大師を奇妙乃驗徳あり。あるひいわるさあるを水
を出し。塩をとる事に塩をつくること。井を穿ホリ水をわくる時
あるべきなり。水を封じてくいざさんで。水乃中とむすびて水を
湯とし。水の色代むとびて火代沸。まこと秘密乃肝要と称し
て九字とつくり。悪魔と追ふ災難とそなる。今俗人は九字と信へ
なりてる信をる者多し

あるべきことハ為とおもてこちまちにふるせつる敏信紙と法乃
をくるを守敏をたぶりくいのりあるをとと云
と按るに妄伝なり如て帝怪不思議と咒しるにい仏法
よりあるべき幻術とつくりのるり。幻術いのと西域より始りて
漢乃武帝のとき中国に流布と。前漢書張騫傳云。以大
鳥卵及犛靬眩人獻於漢 注曰眩讀與幻同服虔曰今吞刀吐火
ちぐ毛蒙婦女乃見代幻術のことにて。者を伝とる
ことあるべきなり。唐太宗帝乃貞観十三年十二月に西域乃
僧来りてくくく人を咒して死せし。名又咒
をして生しむ。帝あれどもこれを伝えて天史令傳奇

はらあらう。蠱がいとくあれ。邪術なり。医学邪へ正をおろそ
事あるつぶと。清原氏咒せ〜むべし。かるうぶとなる。変うふ
ハ〜とうく彼僧ハ蠱を咒せ〜むるに変化くがくしうる。
僧侶を依て死ことと通猫綱鑑ふ記せるふハ色たち。又
ゆうさあるあ〜氏出ととこ〜人今の世ふを地形を見水脈と
そうう穿かせるふ土ぐひ今〜。又ふ年に塩をつぐを井を
ほるふまうこをあよ住せるふ古俗塩乃出つ所あよ井と穿あく
つ〜ものなるべし。五雑組ふ蜀有鹽井ゆ記し。我国ふも所
くよあり。昆等乃ふ多ひなんで海ふ近氏ふ氏ふ。
又ふ氏ふひ〜氏あるべうとて水を封ぢうふ氏邪ふ。

ふ経論漏とあ〜へを空海水れ所をむうんで喝氏うふハ
さ氏〜。云用乃ふ氏人ようひあ〜べうる氏いうてゆと
封じ。未代まぐく然を貽さんや。又九字乃まつりと佛道よ
あうど。抱朴子ふ入山宜知六甲祕祝。祝曰臨兵鬪者皆
陳列前行。凡九字常密祝之無所不避。要道不煩此之
謂也とあり。と世ふ亟僧九字ハ行字を除き前字のよふ
在字を加へうるものなり。昆道士乃邪法ふ〜く信そうに
ふうう〜ど。又空海面を彩ふ〜ゆあ〜とといふも濫なりずべて
要ハ人界〜ふをれ畢とるべけ〜首穀のさうあよいのふを
ふ。要ふ〜ハ〜ふ〜ふ〜ふ乃どうやく〜ちくしおやまうを謝〜

故一たゝびこの民職をうしなふ事は婦人
をうつ笞首ながれて。諸吏個ようと云ふ事をのべ善男
女八人を離れて。雲中華天の雲なり我
朝皇極帝の雲も大槃涅槃
業報をもさぼくんるあるよりまつふあつる非種を基とし
かゝれば不種の基をなして神明仏乃感格あるんや。
又や敏をいはゝ敏と事偽るとなり道徳不敏をあるとゝべ
き信のいふ不和をれどとゝく報よひとゝさゝ紙情なく
形ところ後を事やあるべさ。神ハ非種をうまでとのべ
ゝ我慢暴悪の信ふ分人をふ神仏あるんや。是ハ

ゝとゝくを海を称せんとゝく妄作をつくるのあり空海
を一霊あるハ額をあつめてあれをかるゝむべし
○真雅乃閻梨なるの業平を云ふく張紙よりゝ説
俗説云ふ雅乃雲梨を空海弟なりぞるの業平おきに
て曼陀羅九ゝをつひゝとゝさあまと云て。ゝひ出ゝゝさハの
山乃岩ゝくじいゝ○でゝうあれゝゝ紙とゝんゝと云
今按ずるに信深秘抄よりゝるの業平十四業ゝり真雅
信ふ者ゝゝひて密法を学びまゝる者。雅ゝ皆ゝゝ
興ゝにゝるゝと紀せゝ紙ゝんまでゝゝ雅ゝ業平ゝ男
女乃膝あゝまゝゝ左もあゝんゝ但ゝ太の説ゝゝ雅ゝ

殺ふあるべし。今昔物語十訓抄ふ左大臣藤原時平二十六七歳乃ころ。叔父大納言國經六十餘ばかりしが。彼妻をもち家中納言棟梁業平乃妻。齢ごすぎたりよてかくちいたくしをなげくころ。業平よ老たる人の妻ともりしを悔ふあるべきなれども。世乃きこえを憚ふ。國經ふ大納言の職よゆきて綾をうぢひとりんこと。彼ちよ。あてかへふべき。彼妻をうぢひあるべきとりあまを。車にのせて出ぬ。國經ふ世乃きこえを憚ふ。とりて。とり出ぬ。山乃岩ふ。いたりあまを。一説よ山乃岩ふ業平負文字を平仲とふ

者ふ。とく國經が妻ふ通ふ。くるぶ。とくにしるべしとあるべし

○榊本紀伊國靈深殿后を惱と說

俗說よ榊本志濃俗云。紀三國ゞみなる所深殿とうて深殿乃ふを殺し。病となりて。とく後死ぬ。一説よ天狗となる。世よ紀伊國靈を鬼と。とく後死ぬ。靈神を鬼と。かの靈をいのりて。とく後ぬ。山乃岩ふ。大石ふ。捆魚和尚と稱ふ。妻說ふ。

日西年。俗云傳地大法師佐志濃乃平とぞ。それ。三代實錄云。貞觀二年二月廿五年と。とく。實乃年乃ふ。志濃后六十九歳。とく。狂病を夏。とく。紀乃。年月甚。おぼ。とく。說。とく。俗說の

あやまりとをるべし。馬ゝよ寛平八年二條后（テウノキサキ）（タカキコ）の子（清和后陽成母）
又十六家にて。東さをるの善綱（ゼンユウ）（一書ニ云ク粟田口信濃ハモトヨリ）と云ふ。
あるゝ后を信（シナイ）とをるべつ。善綱（ゼンユウ）い信濃（シナノ）国ゝ流（ナカ）うるかと舊記（キウキ）
にあるを 拾遺和歌集ゝ善綱法師（ゼンユウホウシ）をぐされるらしとき母のつひにはつてうるゝ。
なくなるべつ。ゆゑうるとかうるんとかなるべきにはきをうるべく
を年歴相違（ネンレキソウイ）く事まをこと似（ニ）たるべるゝ善綱（ゼンユウ）を清潔（セイケツ）とつ。
二家后を深殿后（ソメドノキサキ）とつやまをつ信濃（シナノ）のなるゝ
○志賀（シガ）の上人（テラノ）京極（キヤウゴク）湯屋（ユヤ）息（ヤスト）ゝ
俗伝云ふ志賀寺の上人京極の湯屋（ユヤ）息（ヤスト）をつくるを寄進（キシン）ふ
ゆゑひとをうふ彼所（カシヨ）ゝをうつるを寄進（キシン）をとをずるゝ。湯屋（ユヤ）息（ヤスト）
あまつ紙あつまを翠簾（スイレン）の内ゝをとをを出（イダ）されをまつに上人

とりにをとをて。はつ長のをうゝ此をゝ乃むをゝ紀をゝ
をゝくゝむつゝとゝゝあゝとゝ
と拾ふゝ京極湯屋（キヤウゴクユヤ）息（ヤスト）ゝを大系図と考ふゝ善綱（ゼンユウ）子の
四女褒子（ホウシ）と云ふ百人一首抄ゝ褒子（ホウシ）宇多帝（ウダテイ）に寵（テウ）せらるゝ。
雅明親王（マサアキシンノウ）載明親王（ノリアキシンノウ）とうむ。元良親王（モトヨシシンノウ）湯屋（ユヤ）息（ヤスト）ゝ
をゝ此ひとくかゝうひまをうゝ。ゝうひぬをべいまをゝ
かゝ年一紀（ネンイツキ）なゝ男とをゝくゝ。ゝうひぬをべいまをゝ
ゝゝうゝとあをゝ上人ゝを寄色（キシツ）のゝゝはをゝをぬべ。
ゝうゝをゝをゝ紀乃歌ゝ上人乃ゝゝ善綱
集ゝ天平寶字（テンピヤウホウジ）二年ゝ正月三日ゝ侍従（ジジウ）堅子（カラハ）王（ミコ）ゝ

侍於内裏之東屋垣下則賜玉帛蹤宴千時内相源朝臣奉勅作歌云中弁大伴家持

むらさきのにほへるいもとにくからばかくにあらましものをとは

乃歌とゝもとあらはすなり

○慧心僧都寂とゝさ胸より蓮華を生ぜり說

俗說に惠心僧都横川すゝく寂せりに胸乃ほとり青蓮華

三本生ぜりとつしはるゝ人の抜くちきと言傳を

と按ずるに本草綱目李時珍ぐ說に牛の黄狗の黄馬乃

黄ぐ麝の臍ぐ通天獣の鮓答皆物乃病みて人をして

寶とも人靈にてぐふなれば病をまねくしるべいちんや

舍獣をやぐ人乃脚をやめるに沙石あるを獣乃鮓答みな

どやぐ人の癖をやめるふぐ乃舍にはぐるものあり物乃

寶にはあらずとやられ皆拙にはるぐてあるて化をとゝるき

ゝ有りぐ舍るゝを卵のゝれぐとゝきをとゝむゝあり。禮氏遺

書ふ載波斯國乃人國中乃古き塚をあぐゝ棺の

内ゝとぐゝをゝゝぐゝぐんのゝれぐゝにかゝゝきおきゝ。

据ゝゝゝゝゝんまゝ内にゝゝ乃摸樣あり。ゝゝ鳥にゝて

蓋ふぐゝゝぐゝゝをかゝゝに女ゝゝゝゝゝゝ欄にゝてな

ぐめたふゝゝゝぐゝ女ゝゝゝゝ常にゝゝゝゝゝゝ病

ありて、夕ゝ云ひきり、あるは融結ぐかくのごとく、宗鑑
溪文集に載せ、隊川乃僧法僧といふ、去般舟三昧乃法を行
て死せんとあるは、葬の法ぐんみちを化せんとして、亀の光
をつゝたる中に、佛像あり。えるさ三寸、骨よわゝどゝ、
あゝど、百千万億、又撒水、優婆塞あり、深親乃法を
あとなし、死せんとして、ゆ、葬せんとふ、四ツ観音像と
ほく、色ちりさざみたるにぐこゝ、ぞこふ、表物わかぐまりて
のふる事あゝ、ど、氣滅感よりんくかゝちと、遊と、光
非癖乃癖疾なりゆとゝ、ゝ、賞とゝて、ゝきで、惠
んぐ胸の蓮華とほゝ、蓮蓋よりぜんゝ、紙袖ぐ、

蓮結ゝく、病のとゝ、ゝのなゝ、
○西行法師普賢菩薩を拝ところ、
俗伝、西行法師江口乃遊女ぐ、方に立ちより、宿泊かゝゝに、
遊女、俗ぬ普賢ゆゝあゝ、白象ゝ象ゝ乗さるゆゝ。
此事あるゝ、人乃紀
ゝふゝなれど略ス
今按ふゝ、撰集抄十訓抄東齋隨筆等にて、書写の性
空上人法華讀誦乃功ゝ、ゝ六根清浄ゝ、
きどゝ、生身の普賢とゝぐんなゝ、ぐゝ、ぐゝ、
いのり、ゝ、七日乃暁、天王寺つゝ、宿乃遊女長者と
ゝぐゝ、それゝ生身の普賢ゝ、ゝ、ゝ、

にしき宮ゆきもちをぶつりうのいぬ　室を郡　海國窓積なり

播磨乃国　長者出あり　敵ととりつよ人よ酒をもとめくる園

湯乃みくしの澤べをふ風乃わたとづまくく　一書ニハ園陽もろ

ばくの中なる

ふくらひ月　そふひどをゆくうくへでなくび屋くる遊女ども。園寄ぬさぐ

ら流くいやきとうくひくるやーぬよ人見ぬさぐさくく移

とくとりーえくよふ猫遊女晋賢のかくちよ祝ぐ六年乃白

象ぬのり眉寄るくちひくくとくもちてる俗男女とてしく。

激ぬ乃ちよ移くとぬーくく。實相云漏乃大海よ及若江へ歌の

風をふくひどくを隨縁まくぬの波ぬくくぬくくさなくと唱ふ。

上人越涙かくへくくして服とひくくさてるんしぐりくる乃女

乃をとぐくぬく國湯みくくしのくくばを出をとよ服ととづき

で菩薩のかくちにくくは風紙ぬるをふぬくくのごくく唐く

紙移くくくくくくへくくを撰集抄よ西行いくく駆ぬ

ふ長月廿日あまりのころ江口とらよあをちぐ行くしは。

家へ南ぬ乃川をくくはくくぬ。ふる樵人清兼乃歌をおくふ

遊女のまくを思いくあるれよくくるをくくのくるくくくくくし

ちぐふぬ紅をくくちくくねむくくぬ西乃くくくくくくくくくくくば。

けーぬくく駅く相野屋をくくちくくちぐくくくくくくくくくく

いとうまさごとそ申さうらめかりのやどり後れ行む云うかと
ようんて侍りしうぞ。おろ〳〵此歌世うちもうらひて。新古今集に
家後いぢろ山家集よりも家を出ろとあり。新古今
集よりハ世をいとふとる後〳〵入さり人とうらあぞ
かりろやどかあ侍らむるてのどりぞ世へて。
ぞ間よいれ侍りとおまちうとたりやまりて。西行がやと
をかりろ江口の遊女夢覺よりぞうらをはうの俗
うなり

朝俗說辨 十 大尾

跋于本朝俗說辨

想夫我朝嘗有八正史等之書既行乎世以
故欲稽歷代之事實者就而閱則數千百載
之陳跡若或親睹焉然童蒙婦女未能讀而曉
漫信俗書之誤還失舊史之實益以其易解也
弊習可歎矣越僕不自虞試蒐輯徧膾炙人
口俗說本乎正史稽於實錄採其所由出辨其
所謬傳記以和字釐爲一書姑便童穉庶幾
後覽之士有取於愚者一得而猶爲訂補焉

寶永　丙戌之秋

蟠龍子節長秀

六角通御幸町西ヘ入ル町
書林茨木多左衛門　開版

九海堂